

第八章・モーマンドの地への前進

この章の冒頭において物語を語る立場の変化に注意しなければならない。これまでの一連の出来事は客観的なヒストリーの形式で記録してきた。しかし今後は他の人々の証言と同様に自分の記憶にも頼ることができ、「私は読者を退屈させたり、個人的な事柄を差し挟んで物語の価値を下げたりしたいとは思っていない。首尾一貫させるには私とマラカンド野戦軍との関係を説明すれば十分であろう。私はイギリス軍の現役騎兵将校が命令を受けるまで待つとするならば、かなりの時間を待つことになるであろうことに気づいた。」*チャーチルは当時インドのバンガロールの連隊に赴任していた。そこで連隊から六週間の休暇を取り、九月二日に記者としてマラカンドに到着した。パイオニア誌とデイリーテレグラフの特派員として、また遅かれ早かれ軍事的立場において軍に加わることを期待して。歴史的記録は目撃者によって記されたときにその価値を高めるか、失うかは疑わしいところである。個人的な観点から見れば、すべてのものはそれが個人に影響を与えた度合いに応じて緩やかな遠近感を持って見えるものである。そして私たちは自分が聞いたものよりも、見たものの重要性を相対的に誇張する傾向があり、物語の細部の正確さが増すと全体のバランスの正確さが失われるかもしれない。それはとても良い論点であるが私は意見を述べようと思わない。この本に着手した元の目的は、北西辺境での戦争の姿を本国の英国人に提示することであったことを記憶している。存在するだけでなく、見ることでできる姿。そして私はこの目的は個人的な物語のスタイルを採用することによってよりたやすく達成されるという考えに傾いている。このように歴史的記録としてはあまりにローカルで、専門性が高く、あまり重要ではないが、読者が場面や状況の真の印象を形成するのに役立つ多くの事実が本書の中に盛り込まれている。記事は重々しくないほうがより鮮明になり、公平でないほうがより活き活きしてくる。「歴史の尊厳」から降りるそれぞれのステップが、それに対応する関心の高まりに伴う限り、私たちはその快い道を、下り道であったとしても、気兼ねなく辿って差し支えないであろう。

第九章では、部隊の作戦の新しい段階も紹介している。モーマンド族が敵となり、場面がスワットからバジャウルに変わる。その地へ進軍する前に、インド政府がこの強力な好戦的な部族に対する遠征隊を派遣する事となった原因や成り行きを簡単に考察することが望ましいであろう。

辺境を一掃した狂信の津波は、他のすべての国境の人々と同様に、モーマンド族に影響を与えた。しかし、彼らの状況はいくつかの重要な点でスワット渓谷の現地人の状況とは異なっていた。このモーマンド族は全く刺激されたり、干渉されたりはしていなかった。彼らの土地を通る軍事道路はなかった。要塞化された基地が敵意をかき立てたり、独立を脅したりしなかった。他者の中で自分たちが長く享受していた孤立を尊重していたなら、

彼らは―イギリスの一定の人々に非常に強く訴えかけているように見える―劣化した野蛮主義の状態にそのままいつまでも留まっていられたのかも知れない。しかし、彼らは侵略者となった。

これらの獷猛な部族民が住んでいる荒涼とした陰鬱な山岳地帯の中心には、ヤロビの寺院と村がある。一つは奉献された陋屋、もう一つは要塞化されたスラムである。この人目につかず邪魔の入らない隠れ家はハツダ・ムラーとして有名な、非常に高齢の独特の神聖さを持つ僧侶の住居であった。彼の名前はナジブ・ウ・ディンであった。しかし部族民は五〇年近くにわたって敬意のあまりその名を呼ぶことがなかったため、それは異教徒の記憶と記録の中のみ保存されている。しかしインド政府は何度かこの男の性格をありありと眼前にしていた。約一三年前彼はアミールと仲違いし、彼に対してモーマンド族を蜂起させた。彼の自宅と出身地はアフガニスタンのハツダ村にあったので、アミールは反抗的な臣民をカブールに召喚してその行いの申し開きをさせることで応えた。しかしアフガニスタンの法的手続きをよく知っていた賢い僧侶は招待を断り、それ以来外部の支配と制約がないモーマンド地域に隠居していた。

このように追放の罰を課すことに満足して、アミールはその罪を忘れることにした。彼は、そのムラーの大親友である部下の司令官「シパ・サラ―」への手紙の中で彼を「イスラムの光」と表現した。とても強力な光、確かに、彼はそれが自分の領内にいることを望まなかった／＼しかし国境の向こうにいたのであればその非常に神聖な人物に尊敬を示すことが適切であった。したがって彼は部下の役人に彼を大事にし、尊敬するように指示した。こうして彼は―必要なきときに使用される―強力な武器を手にするようになった。扇動によるものであろうと個人的な動機によるものであろうと、ハツダ・ムラーは長い間英国の権力に対する苦々しい敵であった。一八九五年に彼はモーマンドの戦士を派遣し、チトラル救援部隊に抵抗した。それ以来、彼は積極的に関与してきた。説教や他のムラーとの連絡によって、進行してくる文明に対抗する大きな連合体を育て上げたのである。

一八九六年彼は、ノウシエラとスピンカーラのマンキ・ムラー―今はインド政府を支持する比較的従順なムラー―との長い宗教論争を終結させた。自らの意見を述べた本を出版し、敵対者のそれを粉砕したのである。この作品はデリーで印刷され、インド中のマホメダンの間で大々的に販売された。無料のコピーが「シパ・サラ―」およびその他のアフガニスタンの名士に送られ、ハツダ・ムラーの名声は国中に知られていた。その影響力が高まったことに加えて、その文筆の成功が彼の奮闘を刺激した。

マッド・ファキールがスワットとブナーを鼓舞している間、この強力な僧侶はモーマンドを扇動した。彼は肉体的には弱者であることが知られていたが、その神聖さと、彼ら自

身の特別な聖人であるという事実がその雄弁さに劣らずこの野蛮な部族を強力に動かした。ジハードが宣言された。イスラム教はいつまで侮辱されているべきであろうか？イスラム教徒はいつまで北の不毛の地に潜んでいるべきなのか？僧侶は彼らに立ち上がって白い侵略者の撲滅に参加するよう促した。死んだ者は聖人となる／これらのカフィールは真の信仰者が使っても良い金や他の多くのものを持っているので、生き残った者は豊かになるのである。

略奪と楽園の組み合わせの魅力には抗いがたいことが証明された。八月八日、六〇〇〇人近くの大勢の集団が国境を越え、イギリス領に侵入し、シヤンカルガルの村を焼き払い、シヤブカドルの砦を攻撃した。この場所は辺境の防衛システムの前進基地であり、ペシヤワルの北西約一九マイルに位置している。通常の守備隊は約五〇人の国境警備隊で構成されている。強力に構築されており、ペシヤワル守備隊が戦闘を開始する時間ができるまで襲撃隊の注意を引いて前進を遅らせることを目的としている。この場合において、これらの両方の目的は見事に果たされた。

モーマンド族の侵攻のニュースがペシヤワルに届くと、すぐに第二〇パンジャブ歩兵隊のJ・B・ウーン大佐の指揮下に遊撃隊が動員され砦の方向に進んだ。八月九日の夜明けに、彼らは部族民がシヤブカドル近くの手強い陣地にいることを発見した。ウーン大佐の配下の兵力は小さかった。構成は次のとおり――

砲四門 第五一野戦中隊

二個戦隊 第一三ベンガル槍騎兵隊……

槍一五一本

二個中隊 サマセットシャー軽歩兵隊……

ライフル一八六丁

第二〇パンジャブ歩兵隊……

ライフル四〇〇丁

合計約七五〇人の兵士。敵の数は六〇〇〇であった。それでも、すぐに攻撃することが決定された。

その後の戦闘についてはマラカンド野戦軍の運命と遠隔的に結びついているため、詳細に説明するつもりはない。前進する歩兵は、六〇〇ヤードの前線でしか攻撃できなかった。敵の陣地ははるかに長く、素早く両翼を回り込んできた。厳しい銃火となった。多数の死者が発生した。退却が命じられた。アジア型の戦争でよくあるように、それはかなり切迫していた。九時頃の様子は危機的であった。このとき、ペシヤワル地区の指揮官であるエルズ准将が戦場に到着した。彼はすぐに、第一三ベンガル槍騎兵隊の二個戦隊にうまく右翼に移動し、正面へ突撃して敵の前進を阻止しよう命じた。運動会のような「撃ち方やめ」が号令された。そして一時停止した。騎兵隊の動きはほとんどの部隊から見え

なかったが、突然全員が敵の銃火の緩みに気づいた。そして部族民が混乱して退却しているのが見られた。騎兵の力が著しく發揮された。巧みに率いられた二個戦隊は、理論家が不可能な路面と呼ぶであろう大きなヌラーの川床の上の一・五マイルの見事な突撃を成し遂げ、そして岩と石の間で速歩にペースを落とした。敵は戦野から追い出された。六十人は実際に槍騎兵に刺され、残りは氣落ちして無秩序に辺境の向こうの彼らの丘に退却した。

死傷者は次のとおり…

イギリス軍將校

重傷—A. ラム少佐	サマセットシャー軽歩兵隊
—S. W. ブラッカー大尉	王立砲兵隊
—E. ドラモンド第二中尉	サマセットシャー軽歩兵隊
軽傷—A. V. チェーン中尉	第一三ベンガル槍騎兵隊

イギリス軍下士官と兵

第五一野戦中隊、王立砲兵隊	死亡	負傷
サマセットシャー軽歩兵隊	○	二
	…	三
	…	九

現地兵

第一三ベンガル槍騎兵隊	…	一	一二
第二〇パンジャブ隊	…	五	三五
その他	…	○	一

総犠牲者数、すべての兵士— 七二

こうした蹂躪はこれらの野蛮人による英国領土の意図的な侵害であり、「フォワード・ポリシー」であるが「フォワード・ポリシー」でなからうが罰せられないままであることはもちろん不可能である。しかし、インド政府がブナヴァルの問題に示したゆらぎとためらい、カイバル峠の要塞の衝撃的で不名誉な遺棄がすべての人心に新しかったため、モーマンド族討伐の命令は軍全体に最大の安心感をもって受け入れられた。司令官が準備した作戦の全体的な計画は次の通り…

一・ピンドン・ブラッド卿とマラカンド野戦軍の二個旅団は相応の騎兵と砲とともに南

バジャウルを通過してナワガイに移動し、九月二五日にその場所からモーマンドの地に侵入する。

二・同じ日にエルズ少将が同じ戦力でシャブカドルを出て、国境の山へ入り北東に進軍して合流する。

三・これがなされた後、ピンドン・ブラッド卿の最高指揮下に連合軍はモーマンドの領域を通過してシャブカドルに戻る。ついでに彼らはハッタ・ムラーのジャロビ村に対処し、部族民の服従を確実にするために罰を与えることが必要となるであろう。軍はその後、既に組織することが決められていたティラ遠征隊に利用されることになるであろう。

ナワガイを出た後、その地の地形については何も知られておらず、地図が存在しない／途中に食糧、飼料、水の供給が存在しないという事実がこれらの作戦の準備と実行を幾分困難なものとした。配給の問題に関しては広いマージンを認める必要があり、現地のすべての不測の事態や障害に備えるため、ピンドン・ブラッド卿は第二旅団にラバ輸送を完全装備した。道路が通行可能であれば、ラクダを伴った第三旅団が続く。

用いられた軍の構成は次のとおり……

一・ マラカンド野戦軍

指揮ーピンドン・ブラッド少将

第二旅団

ジェフリーズ准将、バス勲章コンパニオン

バフ隊

第三五シーク隊

第三八ドグラ隊

ガイド歩兵隊

第四中隊（ベンガル）工兵隊

第七山岳砲兵中隊

第三旅団

ウォードハウス准将

女王陛下下の連隊「この連隊は第三旅団ではゴードン・ハイランダーズと交代した。」

第二二パンジャブ歩兵隊

第三九パンジャブ歩兵隊

第三中隊（ボンベイ）工兵隊

第一山岳砲兵中隊 王立砲兵隊

騎兵隊―第一ベンガル槍騎兵隊

連絡線 第一旅団

メイクレジョン准将

王立西ケント隊

ハイランド軽歩兵隊

第三一パンジャブ歩兵隊

第二四パンジャブ歩兵隊

第四五シーク隊

第七英国山岳砲兵中隊

そして、次の追加部隊…

一個戦隊 第一〇ベンガル槍騎兵隊

二個戦隊 ガイド騎兵隊

二・モーマンド野戦軍

第一旅団

第一大隊 サマセットシャー軽歩兵隊

マキシム機関銃支隊 第一大隊デボンシャー連隊

第二〇パンジャブ歩兵隊

第二大隊 第一グルカ隊

AおよびB分隊 第五英国野戦病院

三個分隊 第三一現地野戦病院

A分隊 第四五現地野戦病院

第二旅団

第二大隊 オックスフォードシャー軽歩兵隊

第九グルカライフル隊

第三七ドグラ隊

CおよびD分隊 第五英国野戦病院

第四四現地野戦病院

師団

第一三ベンガル槍騎兵隊

第三山岳砲兵中隊 王立砲兵隊

第五(ボンベイ)山岳砲兵中隊

第五中隊(ベンガル)工兵隊

第二八ボンベイ先発工兵隊

第一パティアラ歩兵隊

CおよびD分隊 第六三現地野戦病院

遠征軍の実際の動きを記録することは、その物語を語ることに着手した者の最も重要な義務の一つである。明快で簡潔であるため、また興味のない読者は読み飛ばしてしまうであろうから、私はピンドン・ブラッド卿がパンジコラ川を渡って旅団を移動させた行軍と作戦の全体を速やかに説明しようと思う。マラカンド野戦軍がゴーサムに無事に宿営した後、振り返って読者にその景色を観察し、道中の出来事に注目してもらおうことにする。

八月末、ラバ輸送を備えた第二旅団がスワット溪谷のカルにいた。第三旅団はウチにいた。九月二日シムラから明確な前進命令が届いた。この指示に従い、ピンドン・ブラッド卿は数日前にあらかじめウチから移動していた第三旅団のウォードハウス准将に命令を出した。デイリのカーンの徴税所長からパンジコラ川にかかる橋を引き継ぎ、通路の安全を確保するべし。六日、第三旅団がサライからパンジコラまで行軍し、ギリギリのところまで橋が敵の手に落ちるのを防いで確保した。敵は既にそれを占領するために集まっていたのである。第一〇野戦中隊の一ニポンド砲が通路を見渡す強力な位置に配置され、旅団は左岸にキャンプした。同じ日にジェフリーズ准将が司令部とともにカルからチャクダラまで行軍した。七日に彼はサライに進み、八日にパンジコラの渡渉を果たし、更に先のコトカイの土手でキャンプした。一〇日、両旅団はゴーサムに行軍し、そこで合流した。マラカンドとの連絡線ではチャクダラとサライに病人と負傷者のための宿場が設置された。パンジコラの背後に前進兵站部が設営され、それを守り、通路を保持するために追加部隊がスワット溪谷から移動した。

細部が機械的に非常にうまく機能したゴーサムでのこの集結に対して、バジャウルと隣接する谷の部族民は反抗的態度を取らないはずはなかった。大きな集団が集まり、九月七

日までは断固とした抵抗のすべての兆候があった。恐るべき連合体が現れたのでビンドン・ブラッド卿はゴースムまたはその近くでの戦闘を予測して、おそらくテル・エル・ケビール以降の英国のどの戦闘よりも大規模となる六個戦隊、九個大隊、三個砲兵中隊を自由に使えるように手配した。「この勝利においてイギリスの死傷者に関して多くの誤解が存在する。よって、二〇分の戦闘で一人の将校と四三人の兵士が死亡し、二二人の将校と三二〇人の兵が負傷したことをはっきりと述べておかなければならない。」

しかしこの予測は失望に変わる運命にあった。強力な部隊の整然とした容赦ない前進は部族民を警戒感で満たした。彼らはパンジコラ橋を占領しようとして中途半端な試みをした、そして機先を制されていることに気づき、再び議論に入った。不決断のこの局面において政務担当官はそのすべての術策を弄した。そして突然、私たちの行く手に集合した巨大な連合体の全てが基部を南の海に溶かされた氷山のように崩壊した。

博愛主義者が何と言ったとしても、部族民が公然とはっきりした立場で前進に抵抗するよう勧めるのが良い方針であったと思われる。もし彼らがそうしていたなら、地上のあらゆる場所を知り、奪い合ってきた勝利者である指揮官の下の強力な大砲に支援された二個の強力な旅団が彼らにひどい損害を与えて打ち負かしたことは間違いない。バジャウルは一撃で片付き、おそらく人命の損失はその後に発生したそれよりもはるかに少なかったであろう。その代わりに、抵抗を分散することが私たちの外交の目的であった。重大局面になるべきであり、そして手術されるべきであったこの炎症は今、全身に分散され、今後の章でその結果が示される。

こうして旅団が無事にゴースムに着いたので、読者にはマラカンドに戻り、そこから司令部スタッフと共に行軍の経路に同行してもらうことにする。九月五日、私が同行を喜びとするビンドン・ブラッド卿とそのスタッフはキャンプを出発し、カル平野を越えてチャクダラへと進んだ。この絵のような要塞の風景と状況についてはすでに説明したが、ここで夜になったため私たちは休止し、行軍は翌朝遅滞なく続けることとなった。チャクダラからサライまでは一二マイルの行程である。カトガツラ峠の頂上に達するまで道は絶え間なく谷を上っている。「カトガツラ」は「喉を切る」を意味し、実際この陰気な隘路が暗くて恐ろしい行為の現場であったと信じることは難しくない。そこから二マイル下るとサライである。途中私たちは第二旅団と出会い、ラバの長い列と行軍する兵を避けるために道路を離れなければならなかった。

サライの谷の幅は約二マイルで、そこから急峻な山が立ち上がっている。すべての小尾根に古代の仏教徒の住居であった赤レンガの遺跡を見ることができ、放り出され、忘れられてから長くなる初期の文明のこれらの遺物は、関心を刺激し、内省を目覚めさせずに

はおかない。それは、「パンテオンから犠牲の煙が昇り、フラビア朝の円形劇場にキリンとトラが繋がれたとき」の時代に心を立ち返らせる。そしてそれは、旅行者がいつか平然と落ち着いて英国のインド保有を示すわずかの石と鉄の断片を調査するのだろうか、という未来の光景までも私たちを憶測させる。実際、残るものは僅かになるだろう。私たちが目下の利益のため、未来でなく現在の虚飾のために築くのであれば、私たちがいつか世界で力を失ったとき、その痕跡は時間とともにたちまち消し去られるであろう。しかし、おそらく、遠い後世のいまだ生まれぬ批評家が、インドの歴史のどの時期よりも「古イギリスの時代」に米の収穫が豊富で、耕作中のエーカー数が多く、人口が多く、死亡率が低かったことを覚えているとしたなら、私たちには記念碑などなくともピラミッドに優る栄光があるであろう。

私たちは六日の夜に第二旅団と一緒にキャンプし、翌朝星がまだ輝いている間に行軍を再開した。サライから五マイルの所で道は細くなりラバの踏みならした道になる。そしてこの先は車輪の通行には適していない。それにも関わらず、第一〇砲兵中隊はそれを通して砲を移動させることに成功し、安全にパンジコラ川に運んで行った。しかし兵士は敵に近づぐために多くのことを成し遂げるものである。川の峡谷の前に広がる景色は陰鬱であるが壮大である。大きな崖がその先の土手に急峻に聳え立ち、道は岩の壁で途切れている。川の流れは速く、橋の約一マイル下流で狭い裂け目に突入して山間に消える。そこには魚がたくさんいるが、流れが速く危険である。そして軍がその近くに野営している間に二人の砲手が落水して命を落とし、流れ去った。確かに数頭のラクダの死体が押し流され、渦に巻かれて、岩に打ち付けられるのを見るにつけ、その事故を理解することは難しくなかった。

ようやく橋に到達する。それはワイヤーロープで支えられた脆弱な構造物である。両端には小さな泥の塔に隣り合った門がある。砲台は右側の小丘の上に設置され、砲身の長い砲は銃眼から反対側の丘を覗き込んでいた。これらの丘の基部の周りで、チトラル戦役において多くの厳しい戦いが行われた。橋から約半マイル先に、ガイド隊が非常に強く圧迫された場所があった。圧倒的な数の部族民のため一晩中窮境に立ち、大佐が殺され、橋が壊れ、川が洪水に襲われたのである。

野外電信は橋頭で止まり、何千マイルもの海と陸地を通じて私たちがロンドンとつないでいる細い糸が切れたことを半ダースの軍事通信士がいる小さなテントが示していた。この先は明滅するヘリオグラフを備えた信号局の短信が唯一のリンクとなる。私たちは電線の末端にいた。私はしばしば反対側の末端に立ってニュースが届き次第テープマシンがカチカチと打ち出すのを見たものである。軍の動き／行動の見通し／戦い／死傷者。なんと光景が違うことであろうか。秋の夕方のクラブメンバーは心配そうに寄り集まっては議

論し、疑問を投げかけ、主張したものである／外の交通の雑音／タバコの煙と電灯の中で。そして電線からたった一時間離れた場所には渦巻く泥水に明るい日光が輝き、峻厳な黒い岩、谷の一マイル上には旅団の白いテント、川沿いには鮮やかな緑の水田の長い縞が連なり、そして前景には茶色の武装した男たちがいる。どちらの末端に居ることが正しいのかについて、私は決して疑いを持たない。ニュースを得るよりもニュースを作る／批評家ではなく俳優になるべきである。

橋を渡るには、鞍を降りて馬を引いて一列に並ぶ必要があった。それでも構造物全体が揺れるので歩行は困難であった。そのような条件下での輸送隊の通行には終日を要し、ラバの長い列を担当する不運な将校は絶えず働いていた。しかし、司令部スタッフはすぐに通り過ぎ、約一マイル先でジャンドル川の支流の浅瀬を渡り、正午頃にコトカイのキャンプに到着した。それから翌日私たちはゴースムに進んだ。しかし道路については興味深いものではないので、読者はこれ以上の説明を快く免除してくれるのではないかと私は思い始めている。私たちはホコリと暑さに難渋してそれを行く必要はない。様々な事件によって注目されることのない、軍の日常の動静を語ることは単調でウンザリするものである。しかし兵士の勤務を真に理解しようとするなら、行軍の疲労とキャンプの単調さを精神的に共有しなければならぬ。優れた功績、戦争のスリリングな瞬間は絵画の中のハイライトに過ぎず、その背景はルーチンの重労働で不快なものである。

ゴースムで第二旅団と第三旅団が合流し、政務担当官と部族民のジルガ（民会）との間の保留中の交渉に参加するまで残った。

すべての文書で純粹にローカルな用語を使用することは推奨されない。おそらく、インドに広く普及した歴史が存在しない理由はキラクターの異様な名前と、その別名が記録を散在させてしまっていることによるのであろう。この記事において私は劣化した言葉の見苦しい方言を避け、現地名の使用を最小限に抑えるよう熱心に試みた。しかし最近採用されたばかりのその用語は、おそらくその意味を説明するのに都合が良いため、このごろ新聞でとても大っぴらに使われている。ジルガは部族民の代表団である。必ずしも部族全体を代表しているとは限らない。それは―非常に多いことだが―少数派の申し入れに過ぎないのかもしれない。それは時折、そのメンバーだけの意見を述べていることがある。したがってある日に決まったことが翌日にしばしば無効になる。ジルガが朝に和平の協約を受け入れるかもしれない、そしてキャンプはその夜急襲されるかも知れない。しかし今の彼らは本物であり、部族の名前と権威において話をした。彼らは政府の協約を聞くため、終日ディーン少佐のテントの前にやってきては並んで座り続けた。課せられた主な条件は、ライフルの引き渡しであった。財力と人口の計算に基づいて決まった数が各一族に要求された。闘争に明け暮れる人生を送っている人々にとって、この刑罰の方法は特別癪なこと

だった。しかし、他の道は開かれておらず、服従し、協約を遵守することを約束して代表団は出発した。彼らの武器を集める努力と熱意を促すために合同作戦は三日間遅らせられ、軍はマンダの近くのゴースムに野営した。

私はこの休みを利用して、少なからず胸騒ぎがするが、デイリとバジャウルの部族政治のもつれた、不明瞭な問題に触れようと思う。助成金の支払いによる恩恵を受けている人々を除き、僧侶によって扇動されたすべての人々は英国政府に対して苦々しい敵意を持っている。彼らは今戦うことを切望しており、彼らを縛っているのは怒りや狂信によってたやすく乗り越えられる恐怖のみであった。地域全体には四人の主要なカーン（*アジアの王族、貴族の称号）が存在し、絶対的な支配権からうつつすらとした宗主権まで、地域ごとに異なる権限を行使している。最も重要なデイリのカーンは政府の公認である。彼はイギリスの影響力を支えられており、私がすでに言及したようにチトラル道路を保護し、維持するために徴税所を委任されている。これらの仕事によって彼は報酬と一定の武器弾薬手当を受け取る。その領民は彼の英国への共感を嫌悪しているためその支配に強く反発しており、彼は政府が与える武器と金銭の助けによってのみ自らを維持している。言い換えるなら彼は人形である。

ナワガイのカーンはインド政府に対して友好的な態度を示すことを恐怖によって強いられていた。彼の領民はこれに憤っておりその立場は不安定である。彼はイギリスのエージェントからいくらかの無形援助を受けており、その領民は政府がいつまで彼を支持し続けるかが不明であり、また彼の困難な立場を部分的に認識しているため、これまでその支配に嫌々服従してきた。

ジャヤーのカーンの地位と態度はそれに似ているが、彼はそれほど影響力のない首長である。四番目の実力者であるカル（*マラカンド峠の麓のカル平原とは別。マムンド渓谷直下の平原。）のカーンは、おそらく最も正直で信頼できる人物である。彼は後の章に登場し、そして読者は彼の行動からその性格を判断する機会を持つであろう。このように、これらの谷では人々はすべて敵対的であるが、その支配者はイギリスに対して友好的な態度を維持することが好都合であり、それゆえ彼らはその領民に嫌われている。

この場において人気のある一派のリーダーは注目に値する。いつものように彼は不在である。一八九五年のチトラル遠征の後、ウムラ・カーンはその領土から追放され、カプーに逃げた。彼はそこに留まっていた。アミールは英国政府に対してバジャウルで彼が問題を起こすことを防ぐ義務を負っていた。アミールが戦争を望むならば、彼はウムラ・カーンを送り返すであろう。これは地域全体、特にジャンドル渓谷、サラルザイ渓谷、およびマムンド渓谷に強い徒党を作り、イギリス人とこれに友好的なカーンに敵対するである

う。アミールは、インド政府への最近の手紙でこれをほのめかした／そして、そのような一段階はおそらく彼の宣戦布告に先行するか、私たちのそれに続くであろう。しかし、アフガニスタンの元首は目下彼が得るものは何もないこと、そして自分に王位を与え、それ以来助成金によってその収入を増加させた大きな権力に対して戦争の挑発をすることによって失う多くのものを知っていた。一方、自らの国境の部族への影響力を維持し、自分が強力な敵になり得るといふ事実をインド政府に印象づけることを強く望んでいるため、彼はウムラ・カーンを機会が訪れたら切るべきトランプ・カードとして持ち続けている。追放されたカーンはバジャウルでの権威を維持するために、郎党を武装させ、養うための資金を十分に供給されていた。

このように簡単に説明した状況は、以下の章に関わる作戦によってほとんど変更されなかった。軍事デモと抵抗した部族に課せられた厳しい処罰が、友好的なカーンの忠誠心と地位を強化した。一方、戦争によって人々の敵意が異常に増大することはなかった。そしてある部族は将来的にトラブルを起こす力になるであろうと思われるその勇氣によって特別な名声を得た。しかし、私はそうした話を先取りしないことにしたい。